慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『太平記』作者の思想 : 「北野参詣人政道雑談事」に現われた政道観について
Sub Title	A study of the Taiheiki : The author's political ideas in "Kitano-tsuya-monogatari."
Author	長谷川, 端(Hasegawa, Tadashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1959
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.9, (1959. 12) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00090001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『太平記』作者の思想

――「北野参詣人政道雑談事」に現われた政道観について――

長谷川　端

まえがき

太平記は、平家物語と共に、一般に軍記物語或いは戦記文学なる概念規定の至極曖昧な文学ジャンルのもとに包括されている。そして、太平記評価の多くが、平家物語との比較から論ぜられ、太平記は戦記文学の白眉である平家物語には及ばないという結論で一致している。

太平記を他の「軍記物語」から区別するものは何か、つまり、太平記の独自性は何か、についての研究がモチーフ追究の面からなされ、黒田俊雄氏[1]の「悪党的反逆的モチーフ」論が高く評価され、又、谷宏氏[2]が「報道的な歴史文学（ルポルタージュ）」として太平記の独自性を評価された。更に、永積安明氏[3]、桜井好朗氏[4]らの批判・反批判が行なわれ、ここ数年間に多くの研究論文が集中的に発表されて来た。

所で、太平記の研究者は、太平記の文学作品としての形象性に太平記評価の比重をかけすぎてはいないだろうか。そうは云つても、勿論、文学作品である以上、その形象性に最大の比重をかけて評価するのが当然であるが、太平記に文学作品としての達成を見る場合、形象性だけを問題にするには余りにも多くの非文学的要素が存在していると思われる。従つて、必ずしも文学的に昇華されているとは云えない多くの非文学的要素については、それはそれなりに考察する必要があろう。

最近、杉本圭三郎氏[5]は、太平記は平家と同様に語り物であつたと云われているが、「聴くという享受形態においては同一であるようにみえながら、語りの方法においては質的な相違がある」とし、ここに平家と太平記の形象の相違をとく鍵の一つがあるという見解を発表した。即ち、氏によれば、太平記の享受形態が清眠の談義僧による談義を基本としているのは、「歴史過程に批判的に対立する太平記の中核的な構造」の然らしめる所だというのである。確かに、太平記作者群の視点はその序に明確に表われているように、「四海大ニ乱テ、一日モ未レ安」という現実であり、「倩其ノ濫觴ヲ尋」ねるというモチーフにおいては一致しているのである。太平記が今川了俊の書いているように、「書継」「切出」しがあるにもかかわらず、その視点・歴史観において態度の一致を見ている事実には驚くべきものがある。二度は読めないと先人をして言わしめたこの四十巻という厖大な作品を書き継いでいった作者たちの情熱は、歴史に対する異常とも言える関心であつただろう。そして、古代の完全な終焉を皮膚で感じ、新しい時代の曙の中に呼吸した作者達は、歴史の理論を太平記の中で開陳するに至つた。それが「雲景未来記」や「北野参詣人政道雑談事」となつて太平記の独自性の一面を示し、作者自身を現わしている[6]と評される重要な章になつているのである。こうした一種の史論とも言うべき章は、恐らくは、太平記とは別個に存在していたものが、太平記が或る程度完成された後に挿入せられたものであろう。

「雲景未来記事同天下怪異事」は第二十七巻の終段であり、そのすぐ前は「去程ニ天下之政道、併武家之執事ノ手ニ落テ、今ニ乱レヌト見ヘナカラ、今年ハ無為ニテ暮ニケリ」（西源院本）となつており、貞和五年はこの章（「左兵衛督欲被誅師直」）で終つており、次の第二十八巻は、「貞和六年二月廿七日改元有テ観応ニ移ル」と貞和六年に移つている事、併せて「雲景未来記」が筋の上から言つても全く前後に関係がない事などから見て、明らかに挿入せられたものであろうと思われる。

次に、第三十五巻の「北野参詣人政道雑談事」の特異な構成に注意を払う必要があるだろう。この段は西源院本では、「山名作州発向事并北野参詣人政道雑談事」とあつて、題からみると副次的な物語のように思われるが、実際には、「山名作州発向事」は七行しか存在せず、あとの二百六十一行は「北野参詣人政道雑談事」なのである。この構成上の不合理が早くから注目されていた為か、流布本では「北野通夜物語」として独立した段になつている。[7]この所謂北野通夜物語を太平記全体の構成の上から検討するならば、多くの重要な問題点が見出され、太平記がどのような成長過程を持つているかについても、ある面では明らかにしうるのであるが、本稿は、あくまでも

北野通夜物語に現われた太平記作者の政道観について考える事を専らにするのであるから、構成上の問題点については要点だけを記すに止めたい。

一、北野通夜物語は個々別々の説話を圧縮したものであること。[8]

二、太平記の同じ巻や他の巻にも同じ説話があることから見て、作者達（編纂者乃至は管理者まで含めて）は太平記のストーリーに対して余り神経質ではなかつたと考えられること。[9]

三、「山名作州発向事」は、次章の「尾張小河土岐東田等事并仁木三郎江州合戦事」に直接継続すると考えて少しも不自然ではないこと。

四、北野通夜物語は太平記中の因果論を支配する最も強力な存在であり、しかも因果論は古本におけるよりも流布本に多く、従つて、後から加わつたものが多いと考えうる中にあつて、この北野通夜物語は、古本系諸本や流布本を通じて存在していること。従つて、太平記四十巻が或る度合において因果業報観で貫かれるに至つたのは、北野通夜物語が出来上がつてからであろうと十分想像されること。[10]

五、北野通夜物語はその構想において「梅松論」と密接な関係があること。[11]

以上の如き要点を手懸りにして考えるならば、北野通夜物語もまた「雲景未来記」と同様に、原太平記とでも言いうるものが成立した後に、しかも比較的早い時期に、挿入されたものではないだろうか。

一

この「北野参詣人政道雑談事」は、秋の半ばを過ぎ杉の梢を吹きならす風のすさまじい或る夜、北野天神の通夜のつれづれに三人の遁世者達が政道について座談を行なうという趣向がとられている。即ち、

(A) 北条氏の旧臣で関東生れの六十余歳の遁世者

(B) その年の春まで南朝に仕えていた儒学者で、体なびやかに色青ざめた雲客

(C) 門跡仕えの仏学研究をしていると思われる細く痩せた法師

の三人による「政道雑談」であり、その構成において「梅松論」より一歩進んでいることが理解される。というのは、「梅松論」では、北野天神の毘沙門堂（当時の民衆の間に毘沙門信仰が盛んに行なわれたことは、楠正成を毘沙門の申し子としていることからもその片鱗がうかがえよう。）に参籠した道俗男女の念珠の際に、「或人」の要請によって多智多芸の聞えある一人の老僧が「先代（北条氏）を亡ぼして、当代（足利氏）御運を開かれて栄耀他に越えたる次第」を物語るという趣向がとられている。これに対して太平記「北野参詣人政道雑談事」では、上記の三人の遁世者が初めは「南無天満大自在天神」という字句を句毎の初めにおいて連歌をしていたが、その後一世上ノ物語ニ成テ、ゲニモト覚ル異国本朝之才覚」に話が及んで来たとして、三人の政談を記す、という風にストーリーがより自然らしくなって来ているのである。又、太平記の第一種本である西源院本や神田本では、三人の通夜物語の聞き手には作者自身が宛てられている訳であるが、流布本系統のものでは、一章の冒頭に「其比日野僧正頼意、偸ニ吉野ノ山中ヲ出テ」（寛永八年刊本による）という一節があり日野僧正頼意なる人物が三人の遁世者の物語を聞いていたという趣向がとられている。従って、流布本では、この北野通夜物語の結びにおいても、「以レ是案スルニ、懸ル乱ノ世間モ又静ナル事モヤト、憑ヲ残ス計ニテ、頼意ハ帰給ニケリ」となっているのである。西源院本では「是ヲ以テ案スルニ、係ル乱ル、世モ又鎮マル事モヤト、憑モ敷コソ覚ヘケレ」（神田本・覚ヘケル）となっていて、頼意が出て来ないのは勿論である。流布本系統の構成の方が遙かに進んでいることが理解されよう。

さて、この座談会は「儒学之人カト覚シキ雲客」の問題提示によって始められる。

抑自二元弘一以來、世亂テ既ニ卅餘年、天下一日モ未二静事得一、自今後モ何ゾ徇ルベキ期有リ共不レ覺、是ハ如何ナル故トカ御了簡候

この問題提示の方法は太平記序の

依レ是四海大ニ亂テ、一日モ未レ安、狼煙天ヲ翳シ、鯨波地ヲ動ス、今至マテ卅餘年、一人トシテ未レ得レ富二春秋一、萬民無レ所レ措二手足一

と非常に類似した発想に基いている。ここに「北野参詣人政道雑談事」の筆者の政治に対する態度を窺う事が出来よう。

この設問に対して、坂東声なる遁世者が「憚所モナク」自己の意見を開陳するのであるが、彼は、今の世の中が治まらないのは当然で

あるという。それは、「王者之憂楽ハ与レ衆同シ」でなければいけない、「乱世ノ根源ハ只欲ヲ以テ本トナス」という遁世者の固い信条から出ているのである。即ち、彼の立脚する所は王道精神であり、且つ治政の方法は主権者の率先実行にあることが力説される。彼の話し方は一般の軍記ものの例に従い、古今の史話引証によつて自らの論を構成しているのであるが、延喜帝、北条泰時、同時頼、青砥左衛門の逸話伝説を縦横に使つて、線の太い批判をおしすすめている。なかでも、延喜帝は理想的王道を布いた賢帝として、中世を通じて憧憬されているにもかかわらず、菅原道真を左遷した科その他五種の罪業により、地獄の責苦をなめている情景を描いている箇所は、なかなか強い筆致で描かれており、筆者の雄勁な精神を感ぜしめる。この箇所は、後藤丹治氏によつて指摘せられているように、明らかに安楽寺本「北野縁起」の影響下に成立していると思われる。(12) 又、この描写は、「冥途ニハ無レ罪ヲ以主トス、然ハ貴賤上下ヲ論スル事ナカレ」という延喜帝の宣言に如実に表われているように、冥途に貴賤上下はないという仏説によるものであろう。

更に少し下の

彼帝隨分愍レ民治レ世給シタニ地獄ニ落給フ、マシテ其程ノ政道モ無世ナレバ、サコソ地獄ヘ墮人ノ多カルラメト覺タリ

は北野縁起には全く関係なく、明らかに「北野参詣人政道雑談事」の作者による政道批判であり、北朝諸天皇を含めての足利政権全般に対する諷刺である。

所で、この坂東声なる遁世者は武家政権をどのように見ているのであろうか。

抑武家ノ代盛也シカハ、尺地モ非二其有一ト云事ナシ、一家モ其レ民ニ非スト云事ナシ、而レ共不レ專二武威一依テ、地頭敢テ領家ヲ不レ蔑ニ、守護曾テ檢斷之外ニ不レ綺、懸リシカ共猶成敗ヲ爲レ正、貞應ニ武藏前司入道日本國大田文ヲ作テ庄郷ヲ分チ、貞永ニ五十一ヶ條之式目ヲ定テ裁許ニ不レ滯、サレバ上敢テ法ヲ不レ敗、下又禁ヲ不レ犯、世治リ民淳リシカ共、我朝神國之權柄武士之手ニ入リ、王道仁政之裁斷夷狄之畔ニ懸リシヲ社歎キシカ、サレ共上代ニハ世ヲ治メント思志深リケルニヤ……

この遁世者は武家主体の政治を容認せず、王道主義をとつている訳であるが、しかし武威を專らにせず善政を行なつた初期北条政権を高く評価しているのである。ここは、坂東声なる遁世者を通じて武家思想を表わそうとした作者が、おのずから自己の意見を開陳し、同時に己れの限界をも示すことになつたのである。当時の知識階級である草庵者は、武家政治を変態的な存在と考えていたのであり、ここ

も知識階級の一人であつた北野通夜物語の作者の率直な思想の表現と見るべきであろう。ついで泰時や時頼を、民の憂をわが憂とした施政者として賞讃するのである。明恵上人が泰時に言つた言葉として記されている「国ノ乱ル源ヲ能知テ可ニ治給一、乱世ノ根源ハ只欲ヲ為レ本、欲心変ジテ一切万般之禍ト成ル」とか「善ト云ハ無欲也」という言葉や、施政者の率先実行をうながした「太守一人無欲ニ成給ヘハ、其ニ恥テ万人自然ニ欲心薄ク可レ成」という言葉は、太平記作者自身の強く感じていたことではなかつたか。乱世の根源は欲にあるという考えが、太平記ほど徹底しているものは他に余りないであろう。同じ武家の世の中とは言つても、昔は善政を行なつたが、「今程ノ人ノ心ニハ違タリ、仮ニモ人ノ物ヲハ掠取ル共、我物ヲ人に遣事不レ可レ有」として、足利政権下の武家一般を弾劾しようという意志が窺われる。ここには、勿論、この遁世者を通じての作者の回顧趣味も多少混入しているであろうが、義詮の優柔な性格、武家社会の惰弱さに対する批判が強くこめられていると見なければならないであろう。時頼の六十余州行脚修行を「三年カ間、只一人山川斗藪シ給ヒケル心ノ程社難レ有ケレト、感セヌ人モ無リケリ」と第一人称表現で賞讃しているのは、施政者としての理想のあり方を示しているのである。

所で時頼の行脚修行について、斎藤清衛博士は「時頼及貞時に関連し、行脚巡礼の徳を指示している点は、筆者の思想が托鉢生活により具体化されているものとして特に注意すべきである。」[13]（傍点は長谷川）と述べられている。時頼の行脚修行は西源院本にも記載されているけれども、貞時のそれは流布本において初めて表われているのである。ということから言いうることは、この種の説話が聴衆・享受者に好まれたこと、他の部分よりも比較的多く語られたことを示している。それは、

旅寢之床ニ秋深テ、浦風寒ク成ヌレハ、折炷ク蘆通夜ヲ伏佗テコソ明シケレ

という一節でも分るように、日野俊基朝臣の関東下りの道行文ほどには手が入れられてはいないが、それでも可成り、手が加えられていることによつても理解されうるのである。そして、時頼行脚修行譚と同工の貞時行脚修行譚が増補されているという事実は、斎藤博士の言われる「筆者の思想が托鉢生活により具体化されている」のと同時に、腐敗した足利政権下に生活する人々が、過去の質素高潔な社会を憧憬していた事を示していよう。斗藪行脚の辛苦について長々と語り、施政者が諸国を行脚して民情を把握することの必要性を真摯に主張しているのは、乱世の根源は欲であり、施政者は無欲たるべきであるという作者の思想の普遍化に他ならない。

更に、北条幕府の忠臣として名高い青砥左衛門の逸話は、寡欲倹約の代表選手としてその徳を表頌したものである。作者は、北条幕府

が八代まで天下を保ち得たのは、「是儘ノ賢才社ナカリシカ共、道理ニ背キ、賄賂ニ媚ル事」をしなかつたからであると説く。この言葉の背後に足利政権に対する鋭い非難があることは勿論である。即ち、すぐ続いて、

夫政道之為ニ俳ナル物ハ、無禮、邪欲、大酒、遊宴、バサラ、傾城、双六、博奕、強縁[14]、サテハ不直之奉行也、治リシ代ニハ是ヲ以テ誠トセシニ、今二代之武將執事一族等、奉行頭人評定衆獨リトシテ誰カ是ヲ好サル物ナシ

と批判している。更に作者は、現実の社会を比喩をもつて、

是ハ只一ノ直ナル猿丸ヲ、鼻闕猿見テ笑ヒケル時、逃去ケルニ不レ異

と、正しい人間が異常とすら思われる社会であると痛罵している。こうした批判は流布本になると「世ニハ是ヲ以テ誠トセシニ、今ノ代ノ為レ体、皆是ヲ肝要トイフ」の如くに抽象化されてしまつていることは注意すべきであろう。

足利政権批判をした作者の眼は当然のこととして北朝の天皇にも向けられる訳であるが、そこでは、「是併テ上方雖二無二御存知一、責一人ニ帰スル謂モ有ルカ」として敢て非難しようとしていないのは何故であろうか。つまりここでは、非難の的になつているのは北朝の天皇というよりは天皇の近臣なのであり、愚管抄の影響があるのではないかと思われる。

作者は、この「坂東声なる遁世者」をしてこう言わしめている。

世ノ治ラヌコソ道理ニテ候ヘ、異國本朝之事ハ御存知之前ニテ候ヘハ、中々不レ及申候ト云共、昔ハ問民苦使トテ、勅使ヲ國々ヘ下サレテ民ノ苦ヲ問ヒ給フ、其故ハ君ハ以レ民爲レ體、民ハ以レ食爲レ命、夫穀盡ヌレハ民窮シ、民窮シヌレハ年貢ヲ備事ナシ、疲タル馬ノ鞭ヲ如レ不レ恐、王化ヲモ不レ恐、利潤ヲ先トシテ非法ヲ行フ、民ノ誤ル處ハ吏ノ科也、吏ノ不善ハ國王ニ歸ス、君良臣ヲ不撰シテ、貪利之輩ヲ用レハ、暴虎ヲ恣ニシテ、百姓ヲシエタケリ、民ノ憂ヘ天ニ昇テ災難ヲナス、災變起レハ國土亂ル、是上不レ愼下慢ル故也、國土若亂レハ君何ソ安カラム

このように君臣合致して政治を行なうことを理想とする考えは、愚管抄に出ている。「世をしろしめす君と摂籙臣と、ひしと一つ御心にてちがふことの返々侍まじきを、別に院の近臣と云者の男女につけていできぬれば、それが中にいて、いかにも〳〵この王臣の御中をあしく申也。」「太神宮、八幡大菩薩の御をしへのやうは、御うしろみの臣下とすこしも心をおかずをはしませとて、魚水合体の礼と云こ

とを定められたる也。」愚管抄において、武家に対する著者の考えが最も明瞭に出ているのは第七巻の結論に近い部分である。そこでは、引用文と同じように、君主と摂籙臣とが君臣合体して政治を行なうべきことが説かれ、別に近臣という如きものの存在或いは介在は、最も不可なるものと説いている。しかも、現在の時勢においては、武士の存在は決して無視すべからざるものであるから、武士を決して敵視するようなことをせず、むしろ、教導して、君主の方から協力を求めらるべきであるとすら言つている。そして不平を抱き謀反をはかるような臣があるならば、武士に征討せしめ、その重だつたものを遠流せしむべきであるとすら説いている。愚管抄のもつ情熱が自家擁護のための時勢への憤激であることは本書の到る所に見られることである。彼の論の第一は仏法と王法とを分離しては日本の正しい発展は考えられぬということであり、第二は藤原氏の摂関擁護論である。第一は当時の仏者の見解であり、第二は慈円の出自（九条家出身）と愚管抄の書かれた目的、動機[15]を考えて見れば当然出てくる立論である。所でこの「北野参詣人政道雑談事」ではどうかと云うに、「坂東声なる遁世者」の北朝観は、それを理想の政体とは思えないという意向が表われている。彼は昔、北条幕府の評定衆に列なつた生粋の関東武士でありながら、足利政権下の武家社会の腐敗と惰弱とに堪えることを拒否して遁世したのであろう。従つて、彼は時代の生んだ精神の一典型である。そうした彼は、結局、南朝に対して未来の希望を托そうとしているのである。それは「宮方コソ、君モ久シク艱苦ヲ嘗テ、民ノ愁ヲ知シ食シ、臣下モサスガニ有智恵人多」いであろうと思われたからである。ここに作者の根本思想が現われていることは言うまでもない。

二

遁世者の提疑を受けて「打ホヽ笑ミテ」（流布本）私見を陳べ出す年若く青白い儒官は、将に青白きインテリという所であるが、御多聞に洩れずニヒリスティックである。ただ、この儒官の南朝論が、遁世者の言説を延長させた所で完成する南朝讃美論ではなく、逆に、南朝になんらの積極的な意志をも見出し得ないと結論するところに北野通夜物語の構想上の奇抜さが認められよう。彼は宮方の政道も足利方や北朝のそれと全く変る所がないとし、天下を覆して王政の代にする見通しもなければ、古の帝の善政を継いで国を治める（延喜帝

の治世を指すのであろうが）事も出来ないので南朝を見捨て、遁世する為に京に出て来たと自己弁護を行なう。こうした自己の正当化からは批判の発展は望みうべくもなく、古今東西に亘る故実を考証する儒者癖を彼も発揮して、いたずらに衒学的になつて行くのみである。即ち、二つの説話を作者は引いているのである。一、は周の太王の善政と万民の彼への思慕の話は、南朝の君主に太王の如き徳があつたならば自分は南朝を見捨てることはなかつたであろうということを暗示し、二、の唐の玄宗が寧王から楊貴妃を奪い、死を賭してその真実を記した三史官の記述に自らの非を悟る、という説話は、私心なき臣（自己を擬していることは勿論である）を南朝の君主が用いなかつたことをほのめかしていよう。作者がここで万里小路中納言藤房を聴者・享受者に想起させていることも容易に想像される所である。所で、こうした説話の冗慢さによつて太平記の文学作品としての形象性は随分弱められている訳であるが、この儒官をして言わしめている次の言葉は、さきの遁世者の言辞と同様に「北野参詣人政道雑談事」の作者の根本思想に触れたものであろう。

國ニ諫ル臣アレハ其國必ス安ク、家ニ諫ル子アレハ其家必ス正シ、サレハ如是君モ誠ニ天下之人ヲ安ラシメント思召シ、臣モ無レ私君ノ非ヲ諫申人アラハ、是等程ニ拂捨ル様ナル世ヲ宮方ヘ拾テ取ラサランヤ、角安キ世ヲ取得スシテ、三十餘年儘南山之谷ノ底ニ、埋木ノ花開花ヲ知ヌ様ニテヲハスルヲ以テ、宮方之政道ヲハ思ヒ遣セ給ヘト、爪彈ヲシテソ語リケル

「南山之谷ノ底」に三十余年入りぱなしの宮方に、京都を回復し王道を樹立するというような「心憎キ処ハ露計モ見ラレス」という有様に我慢出来ず、京都に出て出家しようと思つている人物の、南朝を排する考えと、己れに対する傲岸さと自嘲の念とが混り合つて、作者に「爪弾ヲシテソ語リケル」という表現を採らせたのではあるまいか。そう仮定するならば、ここの儒官の言葉は「知識層なる作者自らの自己弁護の筆とも考えられ」[16]ると見るよりは、決然とたつて社会改造を行なう実践者としての途を選ばずに、深山幽谷に逃避して行つた多くの人々に対する「北野参詣人政道雑談事」の作者の批判と見る方が適当ではあるまいか。

更に、「誠ニモト思居タル処」とは作者の感想であつて、三人の登場人物のそれではない。即ち、これは、「坂東声なる遁世者」が足利幕府を攻撃し、北朝の諸帝をも暗に非難し南朝に希望を抱いている旨を述べたのに対して、色青醒めたる雲客（儒官）が、南朝も同様であつて、とても現今の乱れた世を収拾する力はないと南朝を排した訳であるが、両者の話を聞き終えた作者が、足利方、宮方の両方に乱世を鎮める力はない事をつくづくと実感として感じ「そうなのだろう」と感慨を洩らした言葉であろう。

三

太平記四十巻の中で第三十巻あたりから作者の関心が社会に強く向けられて来ることは注目すべき事柄である。

此廿餘年ノ兵亂ニ禁裏仙洞竹園椒房ヲ始トシテ、公卿殿上人、諸司百官之宿所多ク燒亡シテ、今ハ十カ二三殘リタリシヲ、又今度之東寺合戰ニ、地ヲ拂テ京白河ノ武士ノ屋形ノ外ハ、在家ノ一宇モツヽカス、薩々タル原上之草、累々タル白骨叢ニ纏レテ、有シ都ノ跡モ見ヘス成ニケレハ、蓮府槐門之貴族、鏗上達部、上臈女房達ニ至マテ、或ハ遠國ニ落下テ、田夫野人之賤ニ身ヲ寄、或ハ片田舍ニ立忍テ、桑ノ門竹ノ扉ニ栖佗給ヘハ、夜ノ衣薄シテ曉ノ霜冷ク、朝ケノ煙絶テ後、首陽ニ死スル人多シ（第三十三巻・飢人投身事）

京都は兵乱のために焼野原となり、公卿と言わず市民と言わず路頭に迷い、或る者は諸国に落ちのび、それも出来ぬ者は多く投身自殺した。又、天変地異が相ついで起り（第三十六巻・大地震并所々怪異四天王寺金堂顚倒事）、人々は生きた心地がしなかつた。こうした中にあつて足利政権下の武士だけが不正をほしいままにしていた、と作者は言う。

公家之人ハ加樣ニ窮困シテ、溝壑ニ塡チ道路ニ迷ヒケレ共、武家之族ハ富貴日來ニ百倍セリ、身ニハ錦繡ヲ纏ヒ、食ニハ八珍ヲ成ス、前代相州禪門之天下ヲ成敗セシ程ハ、諸國ノ守護、大犯三ケ條之檢斷之外ハ綸無リシニ、今ハ大小事只守護之計ニテ、一圓之成敗ヲ任ニ雅意ニシカハ、地頭御家人ヲ郎從ノ如クシ、寺社本所之諸領ヲ兵粮ノ料所ト號シテ管領ス

彼等は「只金ヲ泥ニ捨テ、玉ヲ淵ニ沈タルニ相同シ」茶会を開いて遊ぶのだつた。

抑此大名達長者ノ果報有テ、自レ地財カ涌ケルカ、自レ天宝カ降ケルカ、非レ降非レ涌、只寺社本所ノ所領ヲ押ヘテ取、訴論人ノ賄賂ヲ集メタル物也

こうした極度の腐敗を、作者は「世ノ嘲ヲモ不レ顧、長時ニ遊ヒ狂ヒケルハ、前代未聞之曲事也」ときめつけている。ここにおいて、社会をこれ程まで腐敗させたものは何か、という問題に作者は突き当らざるを得なかつたのである。即ち、当時の政治に対する批判をうち

出す必要があつたのである。作者は、社会を本とする人民の立場から政治の批評を行なおうとしたのではあるまいか。それが三人の遁世者による「政道雑談」という構想を生んだのであろう。民衆の毘沙門信仰にささえられている北野天神が選ばれた理由もそこにあるのではあるまいか。「北野参詣人政道雑談事」の「自今後モ何ソ徇ルヘキ期有リ共」考えられぬような政治の貧困は如何なる理由によるのか、という質問は、満を持した問であつたのである。しかしながら、「坂東声なる遁世者」と「色青醒タル雲客」の問答に解決の緒を見出すことは出来なかつた。作者は、足利方にも南朝にも現在の混乱を収拾する力のないことをつくづくと知らされたのだつた。従つて、

天下之亂ヲ倩案スルニ、公家之御禍共武家之僻事共難申

と言う「内典之学匠ニテソ有ラント見ヘツル法師」の言葉は、作者自身の声でもある。しかし、「只因果ノ感スル所トコソ存候へ」という言葉によつて、我々は、「北野参詣人政道雑談事」の作者が、政治の貧困の原因追求をあきらめたことを知らされるのである。それは同時に、太平記の文学としての達成への道も、史論としての追求の可能性もとざされてしまつた事を意味しているのである。

武士者飽ニ衣食一、公家ハ及ニ餓死一モ、皆過去ノ因果ニコソ候ラメ

と、全ては仏教の因果業報観に結びつけられ、

三人共ニカラ〳〵ト笑ヒケルカ、晨朝之鐘ノナリケレハ、夜モ既ニ朱ノ瑞離立出テ、各カ様々ニ歸リケリ、是ヲ以テ案スルニ、係ル亂ル、世モ又鎮マル事モヤト、憑モ敷コソ覺ヘケレ

という作者の感想で「北野参詣人政道雑談事」は終つているのである。即ち、作者は、武士は衣食に飽き、公家は餓死に及び、寺社本所の所領は強奪され、士民百姓は片端から財産を奪われ、訴訟しようとすれば必ず賄賂をとられる、といつた現実社会を直視することを避け、この乱脈を極めた現実社会を何とか肯定しようとする見方にまで一挙に堕落しているのである。「憑モ敷コソ覚ヘケリ」という西源院本の表現が、流布本において「憑ヲ残ス計リニテ」と変つていることも、現実が少しも「たのもしく」ない事を考えれば尤もな変化だと言えよう。結局、「憑モ敷コソ覚ヘケリ」という表現は、現実を直視することを止めて矛盾の多い社会を、逆に、何とか良くなるだろうという楽観的な因果業報観ですり換えてしまつているのである。

考えて見ると、「北野参詣人政道雑談事」の結語である「是ヲ以テ案ズルニ、係ル乱ル、世モ又鎮マル事モヤ」という淡い待望は、太

平記四十巻の結末において、細川頼之が衆望を荷つて管領職に就いたことを語つて、「中夏無為之代ニ成テ、日出度カリシ事共也」と結んでいるその結び方に無関係ではあるまい。いや、無関係どころではなく、大いに関連づけて考えてこそ、「北野参詣人政道雑談事」の結語が生きて来るのではあるまいか。

註

1 「太平記の人間形象」(「文学」一九五四年十一月)

2 「太平記の評価について」(「文学」一九五六年四月) この論文の中で谷宏氏は、「太平記のばあい、当時の民衆の人間解放に根ざしているところの作品形成のエネルギーの真の性質と、太平記がそれにこたえねばならぬ要請すなわちいま全国的にひろがつてゆく動乱の現実を人間がつくつてゆく歴史事実として表現しなければならぬという任務とは、ほんらい矛盾しあい、芸術作品として完全に統一しがたいものであつた。つまり太平記は、その作品形成のエネルギーをそのまま芸術的昇華のエネルギーにすることはできないという宿命を負うことなしには、ああした歴史文学になることはできないものであつた。ここに太平記固有の問題――一つの報道的(ルポルタージュ)な歴史文学として成立するほかなかつた事実、したがつてわれわれはこのような作品として、叙事詩ではなくまた単に芸術作品でもありえなかつたそういう作品として評価しなければならないという、太平記評価のための前提が、つかまれるようにおもう。」と述べている。これに対して永積安明氏は、「太平記論」(『中世文学の展望』所収) の註9で谷宏氏が太平記をルポルタージュ的文学としたのは「現象に追随し、非文学的になつたことでしかないのだから」「あたらない」と簡単に否定しておられるが、報道的(ルポルタージュ)な歴史文学という言葉の当否はしばらくおくとしても、太平記を安易なロマンチシズムへと押し流すことを阻止した作者の態度には、谷宏氏の評価した方向が存在していると思われる。

3 「太平記論」(『中世文学の展望』所収) 註17

4 「太平記論」(「文学」一九五七年六月)

5 「太平記論――平家物語との関連について――」(「文学」一九五九年八月) 既に釜田喜三郎氏は、禅僧によつて太平記が流布されただろうと言うことは、「太平記が平家物語の琵琶法師による流布に対して全く異なつた角度から見なくてはならぬのであり、同じく民衆によつて作られる叙事詩的文芸とは云ひながら、太平記と平家物語が同一視し得ない点に、本質的なものがある。」(「国語と国文学」昭和十三年九月所収「太平記作者の問題――叙事詩文芸の挿話に関連して――」) と書かれたが、杉本圭三郎氏の論文は、語りの方法に質的相違があり、そこに平家と太平記の形象性の相違があるとした点で正に卓見と言うべきである。

6　魚澄惣五郎氏「吉野山と山伏」（『古社寺の研究』所収）その他

7　何時から「北野参詣人政道雑談事」を「北野通夜物語」として独立させたかという問題は、流布本を綿密にたどつて行くより方法がないように思われる。又、これを延文五年の所に持つて来た理由もわからない。本文中には「自二元弘一以来、世乱テ既二卅余年」とあるが、延文五年（一三六〇年）は元弘の乱（一三三一年）から数えて二十九年後であり、卅余年ならば貞治元年（一三六二年）以降であるべきである。尚、続本朝通鑑巻三十六に次のような記述がある（これは既に斎藤清衛博士が「北野通夜物語」国語と国文学昭和七年八月の附記で触れられている）。

頃間隠士一人寒士一人老僧一人詣北野社。終霄連歌而後談倭漢故事、或談神道仏法。或述本朝古昔王道、或語北条泰時時頼政令、諷刺今之王道衰、而武政之不振及東方白。或記其所語件々号北野通夜物語。一説隠士者北条四郎泰家入道恵性也。依其姪時行在伊豆国、年又有所祈願、密入洛匿名詣社。寒士者故右少辨藤俊基子蔵人大夫俊秀也。候南朝嘆皇運不可開。而出吉野寓洛中。老僧者南朝僧正日野頼意也。三人会於社中、通霄相語、其後頼意匿己名以為所聞之談、而語其兄日野大納言、由是流伝於世云。

8　「北野参詣人政道雑談事」に見られる説話を順に並べると次のようになる。

(1)延喜帝が菅公を太宰府に流した為地獄で責苦に会つている様を日蔵上人が頓死して見聞したこと。

(2)北条泰時が明恵上人の法談を聞いて善政をなしたこと。

(3)北条時頼が諸国行脚に出て所領を失つた老尼に会い、鎌倉へ帰つてから所領を復してやつたこと。

流布本では次に、北条貞時と所領を失つた老我内大臣のことが附加されているが、これは(3)と同工異曲である。

(4)北条氏の家臣で、銭十文を滑河へ落したばかりに令名高い青砥左衛門のこと。

(5)周の太王が人民の為に戦争を拒否し、万民から慕われたこと。

(6)玄宗皇帝と楊貴妃のこと、三人の史官が死を賭して玄宗の乱脈振りを記録し、最後に玄宗に悟らせたこと。

(7)瑠璃太子を扱つた因果譚

(8)梨軍支を扱つた因果譚

9　(1)の説話は第二十六巻の終段「吉野炎上事」に見えている。共に第十二巻「菅丞相事」（流布本では「聖廟の御事」）と同様に北野縁起を典拠としている。

(6)の逸話は少し内容を変えて同じ第三十五巻の「畠山入道道誓謀叛事附楊国忠事」に見えている。

10　釜田喜三郎「民族文芸としての太平記の成長――因果論を中心として」国語と国文学昭和十八年三月参照。

11 角川源義氏「文芸と趣向の問題」(『悲劇の文学』所収)参照。

12 後藤丹治氏『太平記の研究』一五六頁。「北野通夜物語に日蔵上人の事が記されてあるが、北野縁起にも同様の日蔵蘇生物語がある。特に北野縁起の安楽寺本の日蔵の条の如きは太平記と文詞の一致するものが多いが、それと関係があるのではないかと思ふ。」と書かれているが、安楽寺本北野縁起(続群書類従第三輯所収)を太平記の日蔵蘇生物語は殆どそのまま採っていることが分る。安楽寺本北野縁起は全文漢文であるのに対し、西源院本では片仮名交りの読下し文になっている。それは単なる読下し文ではなく、例えば、「忝モ延喜ノ帝ノ御声ニテソ御在ケル、不思議ヤト思テ立寄テ事ノ様ヲ問ヘハ」の如く、「北野参詣人政道雑談事」の作者の感想が入り、又、敬語がより多く用いられている。更に「罪人有ニ四人」「一人者延喜帝、残ハ臣下也」のように、北野縁起には全然ない文詞が入り、「北野参詣人政道雑談事」の作者の、北野縁起を自らの手で構成しようとする意図が見られる。これは注意すべきであろう。更に重要なことは、本論文で引用したように、最後に、「彼帝随分愍レ民治レ世給シタニ地獄ニ落給フ、マシテ其程ノ政道モ無世ナレハ、サコソ地獄ヘ堕人ノ多カルラメト覚タリ」という作者の政道批判が加えられていることである。

13 「北野通夜物語」国語と国文学昭和七年三月。

14 流布本では、「強縁」と「サテハ云々」との間に「内奏」が挿入されている。

15 村岡典嗣氏は「実際的の経世論が愚管抄の著作上の重要な目的であったことは明らかである」(『日本思想史上の諸問題』所収「末法思想の展開と愚管抄の史観」)と言い、松本新八郎氏は「慈鎮が承久元年将軍頼経の東下という新事態を控えて、頼経の扈従の公卿たちに心得として読ませるために書きはじめた」(岩波講座日本文学史第六巻所収「歴史物語と史論」)と見ている。

16 斎藤清衛博士・前掲論文

(これは昭和三十四年六月二十七日芸文学会での発表に多少加筆したものである。)